風の末裔シリーズ・2nd シーズンの３

～ 蛍火 カワセミ ～

蒼の里の喉かな朝。
上空の黒い点があっと言う間に騎馬の姿になり、濃紺の巻き髪の青年が、軽やかに馬繋ぎ場に降り立った。年若な割に髪も眉も色濃く、くっきりした目の縁取りは、絵物語に出て来る勇壮な騎士を彷彿させる。

「ツバクロ？　ツバクロが通るわよ！」
「本当、ちょっとここお願い！」
「あーん、私だって、お顔見に行きたーい！」
洗濯場で作業していた女の子達が、かしましく騒ぎ立てる。
馬を馬事係に預けて、長の執務室への坂を登る青年を、パオの窓から、鈴なりの娘達の視線が追い掛ける。

「よっ！」
横道から大柄な青年が現れた。
「相変わらず、お嬢様方の視線総ざらいだな」
「…ノスリ…」
「羨ましいこった！」
青年は頭の後ろで手を組み、女の子達に聞こえるようにわざとらしく大声で言った。

「ノスリも素敵よ！」
ノリのいい何人かが窓に肘を付いて、キャラキャラと騒いだ。
「二の腕がね！」
ノスリは振り向いて力こぶを作り、腕をパシパシ叩いて見せた。女の子達は、またかしましく笑う。
「・・・！」
かしましい面々が急に黙った。一斉に額に盾線が入り、さて仕事仕事…と、そそくさと奥へ引っ込んでしまった。
二人はゆっくり振り向いた。
……やっぱり……。
「ノスリィ～～～！　ボクを置いてかないでよぉ～～～」
寝起きのぼっさぼさ頭のカワセミが、裸足で突っ立っていた。ダブダブのローブがずり落ちて鎖骨が見え、こけた頬の上の大きな目はどんよりと落ち窪み、手首とくるぶしは関節の上に皮を被っただけの鶏ガラ。その細い手足や首に、細鎖で繋げた石がザラザラびっしりと巻き付いている。
小さい子供が夜道で会ったら、間違いなく泣き出すだろう。
「はぁ……」
ツバクロも溜め息付いた。
「靴くらい履いたら？」

「ダメ！　今、感覚が落ちてんの！　余計なモン身に付けたら、術が逃げる！」
　この魔力至上主義者は、放っておいたら、素っ裸で歩く事さえ厭(いと)わないだろう。
「折角、女の子達と楽しくコミュニケイションしていたのに、逃げちまったじゃねえか」
「逃げるようなオンナノコは放っとけ」
「お前見て逃げない女子供がいるか?!」

　相変わらずのコンビだなあ…と感心していて、ツバクロはいきなり後ろから突き飛ばされた。
　よろけながら振り向くと、青筋立てたオタネ婆さんがノシノシと通り過ぎ、ノスリにぶら下がっているカワセミの首根っこを捕まえた。
「この小わっぱ～～！　長の御前へ行くのに、その風体を何とかせいとゆうとるじゃろうが！」
「やだ！　長はこの石さえちゃんと付けてりゃいいって、言ってくれたもん！」
　小悪童(こわっぱ)はそう言うと、婆さんを振りほどいて、長の執務室のパオにバタバタと駆け込んでしまった。二人も婆さんに会釈しつつ後に続く。
「挨拶くらいして入りましょうね、カワセミ」
　蒼の長も相変わらずだ。
　朝っぱらからピシリと法衣を着こなし、髪の毛一本隙が無い。その一番弟子のカワセミは、どこでどう間違ってこうなるんだろう?
「それから、靴は履いておきなさい。足の傷から入る病は恐ろしいですからね」
「はあい」
　長の言う事なら二つ返事……。苦笑いする後から来た二人に、長が向き直って、机の上の数枚の書類を取り上げた。
「御苦労でしたね、ツバクロ。続けての任務、大丈夫ですか?」
「こいつは大丈夫ですよ。女の子達に元気を注入して貰っているから」
「ノスリ…、君が言うと何か卑猥に聞こえるから、やめてくれ」
　長はニコニコしながら、書類を一束づつ三人に渡した。
「今回は一人づつ別々のお仕事です。ケガのないよう、気を付けて頑張って下さいね」
「え～～～」

案の定、カワセミが駄々っ子な声を出した。
「ボク、ノスリがいないと困るぅ…」
普通に考えたら我が儘甘えんぼ小僧だが、長もノスリも、カワセミには甘い。だってカワセミの場合、ノスリがいないと、ホントのホントにトンでもないコトになったりする。

「すみませんね…、今回どうしてもそうなってしまうんですよ。私がひとつこなせればいいんですが…」
「あ……」
そうか、今日は長の妹君が、二年振りに大陸から戻って来る日だっけ。
「心配要りませんって、俺らに任して、長はゆっくり水入らずして来て下さい」
ノスリが頼もしく胸を叩いた。
「ボクぅ…、ノスリの手伝いするから、その後一緒にこの仕事するんじゃダメ〜〜?」
カワセミはまだ未練たらしく粘る。
「俺の仕事って、馬の入れない深山の妖魔退治だぞ」
「……」
「徒歩の山歩きじゃ、お前、着いて来られないだろ?」

「じゃ…じゃあ、ツバクロ〜」
「んー、疫病の治療と防疫指導だから…。君が病気を貰ったら、シャレになんないよ?」
カワセミはペタリとしゃがみ込んだ。
「ボクって…もしかして、無能……?」
三人、顔を見合わせて、音を立てずに溜め息を着いた。
いつもの事なのだが……。

＊＊＊

そんな訳で、結局カワセミは、一人でこの湖のほとりにいる。三人がかりで宥(なだ)められて。
湖に何かよく解らないモノが住み着いたらしい…から、監視と調査。
「何てあやふやな任務…」
でも、力も体力もない自分が出来る事は限られている。そんな事は分かっている。真実を見据える術が本当に必要なケースって、実はあんまりない。
だからこそ、その数少ない機会にベストで役立てるよう、常日頃から研ぎ澄ましていなくてはならないのだ。血の薄い自分は、ギリギリの所にいないと、魔力を保てない。解っているんだ…。

山からの水が細く流れ込んでいる岸部が、見通しの良い砂州になり、その奥に小さな林がある。
馬を林の中に放し、手頃な木を見つけて中頃の枝に座禅を組んで座った。丁度湖全体を見渡せる位置だ。
まあ、じっとしているのはお手の物だ。このまま気配を消して、気を張り巡らせていればいい。何か動けばすぐ分かる。

「……？……」
何か来たけれど、妖しいモンじゃない。馬に乗った人間だ。この近くの住民だろう。
流れを渡ってこちら側で馬を降り、カゴと小さな網を持って水際へ入る。流れ込みの浅瀬の海老でも捕りに来たんだろう。
しかしその人間は、海老捕りもそこそこに、岸辺の流木に座り込んでしまった。
まあ、人間だって、考え事ぐらいするだろう。
他に動く物もないので、何となく、ボ――…と眺めていた。
不意に、その人間が振り向く。そこで初めて、若い女の子だと分かった。だからって、別にどうでもいいんだが…。
女の子は立ち上がってこちらへ歩いて来る。
「…？　まさかね……」

稀に自分達を見られる人間はいる。でも、大概、物心も付かない幼児だ。それ以上成長しても見える者は、自分の知っている限りでは、キビタキとその父親だけだ。

女の子が視線を上に向ける。目が合った…??…気がした?女の子はそのまま視線を下へ逸らせた。そこには、人間が建てた小さなお堂があった。湖の神サマを奉ったモノだが、形だけで何も入っていないので、カワセミは気付かなかった。

「あれを見ていたのか…」

カワセミはほっとした。

女の子はお堂に近付き、懐から団子を出してひとつお供えして手を合わせた。

「海老が一杯捕れますように!」

可愛いモンだな…、ちょっと声を立てて笑った。

女の子が視線を上げ、また目が合った。

「……」

しかし女の子は無反応で、また視線を降ろし、お堂に一礼してから水辺に戻り、海老捕りを済ませて去って行った。

「気のせいだよな? 見えてる訳ない……」

夜の間も、木の上で少しづつ睡眠を取っては監視を続けた。こういうのは長丁場と相場が決まっている。まあ、自分向きの任務だ。

朝になって、昨日と同じ位の時間に、また女の子は現れた。今日は海老捕りの前にお堂に来た。昨日供えた団子が、そのまま残っている。まあ、当たり前なのだが…。

「あらぁ……」

また視線を上げる。

「神サマはお団子がお嫌いなのかしら…」

大きな独り言。

「……」

女の子は、また視線を逸らして背中を向け、湖に歩きかけた。カワセミが言葉を発したのは、ほとんど気まぐれだった。

「神サマは十穀断ち中です。甘いモノは食べません…」

女の子はちょっと止まってから、振り向かずにそのまま水辺に向かい、何事もなかったかのように海老を捕り出した。

「やっぱり気のせいか…」

そうして海老を捕るとすぐ帰ったのだが、夕方になってまた現れた。海老捕り道具ではなく、風呂敷包みを下げている。

真っ直ぐお堂に来たかと思うと、風呂敷をパサリと解いた。

「・・?! 何、考えてんだ?!」

蓋付きの器に湯気を立てた乳粥が詰まっていた。

「神サマ、十穀断ちは身体に良くありません。そんなにガリガリじゃ、病気になってしまいます」

――――!!!!!――――

見えてる?! 聞こえてる?!

＊＊＊

「……!!」

カワセミは木の上で座禅を組んだまま固まった。

今まで、自分が見えていないと思っていたから、気楽に眺めていられたんだ。相手が自分を見ていたと分かったとたん、急にこの女の子がリアルに生々しく映った。

頭に刺繍のスカーフを巻いて髪をまとめ上げ、目鼻立ちは…まあ、整っていると言えるのかな? カワセミは女のコの美の基準が判らない。ただ、黒目の後ろの青みがかった部分は綺麗だなあ…と漠然と思った。

…? ひとつ、不自然に気付いた。その辺の遊牧民の娘なのだろうが、上衣はそれなりに粗末なのに、ズボンだけえらく高級品を履いている。おそらく大陸産の正絹だ。貰い物かもしれないが、海老捕りに着て来る物ではない。

カワセミが相変わらず黙っているので、女の子はまた視線を落とした。
「神サマは人間と関わってはいけないのかしら…」
「……」
「でも人間は神サマが心配だわ。少しでもあがって下さいな」
言うだけ言うと、湯気の上がる器に蓋をして、お堂に置き去りにして行ってしまった。

その夜も昨日と同じように監視を続けたが、湖に変化はない。
ただ、何度か気配は感じた。何か居るのは確かだが、悪いモノか、無害なモノか？　まだ判断しかねる。もう少し監視が要るようだ。

「あらぁ……」
女の子は蓋を開け、手付かずの冷えた粥を見て、呆れた声を上げた。
木の上の蒼の妖精は、相変わらず無表情で微動だにしない。乳粥の匂いの誘惑に負ける位なら、カワセミはここまで成れていない。しかし、これ以上この乳粥娘(スジャータ)に構われるようなら、監視の場所を変えた方がいいだろう。

女の子は器を風呂敷に包み、肩を落として黙って去りかけた。その様子が何とも憐れに思えて、一言位なら関わってもいいかな、という気になった。
「この湖は…」
女の子が目を輝かせて振り向く。
「妖(あやかし)が住み着いています。暫くは近寄らない方が宜しいでしょう」
これでこの子も来なくなるだろう。ひと安心だ…と思ったが、女の子の唇からは思わぬ言葉が飛び出した。
「知っています。だから来たんだわ」
「…?!」

カワセミは初めて女の子に違う表情を見せた。すなわち、目を見開いて口を少し開けた。
女の子はお堂を通り越して、二、三歩カワセミに近寄った。
「数日前、大きなうねりを見たの。なのに水面は平らなまま。人間世界のモノじゃないって思った」
「……」
カワセミは相変わらず目を見開いている。

「それで、蒼の里から調べに来ると思ったんです。会えるんじゃないかと…」
「…誰…に…？」
「お父さんに」
女の子の目の前で、カワセミは地面に落っこちた。

気が付くと、擦りむいた鼻の頭と手のひらを、女の子に手当てされていた。
カワセミは跳ね起きた。
「イタ、イタタタ…」
「手首を挫いていると思います。あんな落ち方するヒト、初めて見ました」
女の子は立ち上がって、水際のヤチブキの葉っぱをパシパシと手折って来た。三、四枚重ねて右手首をくるみ、頭に巻いていたスカーフで、慣れた感じで固定してくれた。
ほどけた黒髪が腰まで流れて、空中に墨で線を引いたようだ……と思った。
「すみません、驚かせて。さっきの……」
「……」
カワセミは背中を向けた。

長に妹君の存在を隠されていただけても結構ショックだったのに、これ以上衝撃を受けたら、どうにかなってしまう…。
「あの…すみません。お父さんっていうの、私が勝手に呼んでいるだけで、血を分けたって意味ではないんです」
カワセミがゆるゆる振り向いた。多分、威厳もクソもない情けない顔をしている。

女の子が言うには、小さい時から蒼の長を遠目に見ては憧れ、勝手に『お父さん』と呼んでいるらしい。
「それ……やめた方がいい…」
「そうですね。蒼の妖精さんに逢う度に、木から落っこちられたんじゃ、大変だわ」
「……」
「ここで、湖の見張りをしているんですか？」
「……ああ、まあ…」
「私、来ちゃ、邪魔ですか？」
「……」
「…邪魔なんですね」
「……人間が海老捕りに来るのを止める謂れはない…」
女の子は明るい顔になった。女の子の明るい顔が、こんなに

もその場の空気を塗り替える物だと、カワセミは初めて知った。
「明日、湿布薬持って来ます」
「結構！　来るのは構わないが、関わりはおやめなさい」
「……」
「それから、長は、来られません。別の所で御用です」
ピシッと言わねば、と思ったのだが、女の子は打ちひしがれた顔になり、また空気が沈んだ。
「…でも、まあ、お元気ですよ…」
たった一つの笑顔を引き出す為に、ついつい余計に喋らされる。女の子って、侮れない生き物だ…。

女の子が粥を器ごと抱えて帰った後、カワセミは林の奥で遊んでいた馬を呼び戻した。一旦、蒼の里へ戻って、中間報告をする為だ。
里へ飛び、馬繋ぎ場から長の所へ向かう坂道で、ノスリに行き逢った。彼は深山の仕事を終えて、長に報告を済ませて来た所だった。
「おう、どうだ、一人で大丈夫か・・？　手首、どうした?!」
「挫いた。でも自分で術を施したから大丈夫。長、おられる?」
「ああ、…んん?　それ、女物のスカーフだな?」
なんって、目敏いんだ！
慌ててスカーフを腕から引き抜いて、懐に仕舞った。
「……拾ったの…」
「ふうん……」

長に報告を済ませてパオに戻ると、…ノスリとツバクロと三人暮らしなのだが…、二人がベッドに腰掛けて、何やら話していたのが、こちらを向いて止めた。
「おう、俺は明後日までフリーだから、今晩から一緒に行ってやろうか?」
「…いい。ボクの任務だから。ノスリは疲れてるんだろうから、休んだ方がいい」
ついぞ聞いた事のないセリフを聞いて、二人は顔を見合せ、真剣な面持ちで頷(うなず)き合った。
「ボク、着替えたらすぐに出掛けるから」
棚からローブを引っ張り出すカワセミの腕を、ツバクロの手がハッシと掴んだ。
「そんなよれよれローブじゃ駄目だ！」
その眼は妙な使命感に燃えていた。

……小一時間後、夕暮れ近い馬繋ぎ場。

道行く女の子達が漏れなく振り向く、見慣れぬ妖精がいた。

ノスリもツバクロも、カワセミは女性っぽいフェロモンを醸し出しているから、『そっち系』に飾れば、そこそこイケるんじゃないか…？　とは思っていた。

「……計算外だな…」

「……これ程とは…」

めったに近寄らない水あみ場に引っ張って行き、頭からザブザブ洗い、衣服は二人のじゃ大き過ぎるから、ツバクロの従姉妹のを借りて来て着せた。

身体のサイズに合ったマトモな服をきちんと着ると、痩せているのも寧ろコケティッシュで、ふわふわの水色猫毛が小鳥の羽毛みたいな、西洋のお伽噺の妖精が完成した。

「……反則だぜ…」

ただし、手足と首の石の鎖は変わらない。そればかりは、どんなに二人に言い含められても譲らなかった。

「これがないと、不安でシんじゃう！」

そして、女の子達の視線なんかてんで意に介さず、時間喰った、夕まづめに間に合うかしら…とブツブツ言いながら、馬に跨がり飛び去った。

魔のモノが動き出すのは、だいたい、逢魔が刻…又は、朝まづめ、夕まづめだ。真昼や真夜中はあまりない。

だから、昼間の内に蒼の里に用事を済ませに行ったのに、妙に時間を喰って、夕まづめギリギリになってしまった。

「まったくあの二人…、着るモンなんてどーでもいいじゃないか、誰に見せる訳でなし…」

これ迄、三日間監視を続けて、気配はあるけれど動きはなかった。もし向こうがこちらの監視に気付いていたのなら、この自分のいなくなった時…、魔のモノが力を発揮出来る夕まづめが、油断して姿を現すだろうチャンスなのに…。

馬を最速で飛ばせて、何とかタまづめの風の止まる時間に、湖が見えた。

「…ほら、やっぱり…!!」

水中にうねりが見える。大きな魚にしては、水の動きは乱れていない。やはり魔のモノか……。

うねりの真上まで一気に飛んだ。こちらに気付いて、うねりは消える。

「もう遅い！　捉えた!!」

カワセミは、既に印を結んでその中に、湖の中のモノを掴まえていた。
真実を見据える目…！　やっと自分の本領発揮だ。
これさえ出来れば、女の子だの着るモンだの、自分の人生には関係なくていい！
水面少し上で馬を停止させる。真下に『何か』が渦巻いている。それを見据え、静かに宜詞を唱える。
「お前…何者だ…?!」
集中して正体に踏み込もうとした瞬間、水の中に二つの眼が光った。同時に水柱が上がる。
「――!!　いきなり襲うか?!」
馬を斜めに飛ばして水柱を避ける。
『それ』が再度襲って来た。相手の射程にいたんじゃ話も出来ない。カワセミは岸を目指して馬を走らせた。
「あ…！　あのバカ!!」
目指す岸に、あの女の子が風呂敷包みを抱えてノコノコ歩いているのが見えた。
「あすこは駄目だ！」
馬を急転回させたので、水柱の直撃を喰らってしまった。それでも馬はよく耐えて、飛ばされながらも岸に向かって方向転換してくれた。
岸の砂地に投げ出されてカワセミはゴロゴロ転がった。必死に立ち上がって、湖から迫るモノに対峙する。
「ボクの任務は、こいつの正体を突き止める事だけ。戦闘は管轄外だ。正体を読んだら、…逃げる！」
印を結び、眉間に集中させて、真正面の『意識』を見据える。
――怒り…憎しみ…・・・寂しさ……??
不意に、斜め後ろから前方に、カマイタチが飛んだ。
「ツバクロ?!」
違う、ツバクロのカマイタチより遥かに貧弱だし、第一ツバクロは、正体を見極めてないモノを攻撃したりはしない。
今、集中を切って振り返る訳に行かない。
「よせ！」
後ろにいる者に一喝する。しかし遅かった。声より前に二発目のカマイタチが放たれ、目の前のモノに命中してしまった。
たちまちそれは怒り狂い、水面に飛び上がった。
「大ナマズ…!!」
瞬間、カワセミはナマズの正体を読み切った。

ナマズは怒りに目が眩んで、手当たり次第攻撃する勢いだ。
カワセミが振り向くと、あの女の子が真っ青になって、両手を前に突き出していた。何で人間がカマイタチを?!
考えている暇はない。ナマズは暴れて、女の子は手の中の風を再度投げようとしている。
「よせってば!」
カワセミは両手を広げて、ナマズを背に、女の子の真正面に立ちはだかった。風がカワセミの肩をかすめて、首の鎖が切れ、石が飛び散った。
女の子が、ハッと怯んだのを見届けて、今度はナマズに向いてその身を広げた。飛んで来る水のつぶてを受けながら、意識をマックスで飛ばして、ナマズの中に語りかける。

――――……・・・・・・・・・・・・……――――

ナマズは静まってくれた。
その怒りの心中に、カワセミは受け入れられた。通わせた心の中で、静かにゆっくりナマズの怒りを解し、その言い分を聞いた。暫く話して、カワセミが顔を上げ、ナマズは水底に沈んで行った。

女の子が茫然としている。
カワセミは湖の方を向いたまま、言った。
「帰りなさい……」
「あ、あの…大丈夫…? あれ、何なの?」
「人間は知らなくていいです。帰りなさい……」
「あの、ごめんなさい、貴方を助けたくて…」
「ボクの言う事を聞く気があるんなら、二度とカマイタチなんて使っちゃダメです。帰りなさい…」
「……」
後ろに駆け去る気配。

数分してから、カワセミはその場にしゃがみ込んだ。
「はあ〜〜〜こわかったあ〜〜」
あれは湖の主だ。
もともとただの大ナマズだったのが、人間への怒りと絶望が高じて、魔のモノへと変化した。人間が水への感謝と慈しみを忘れて傲慢になるのは何時の世も同じ事。
あのナマズは導き次第で湖の守り神になれる。後は長に任せよう…。
足元に飛び散った護り石に目をやると、何だか疲れと落ち込

みが一気に来た。
あの女の子も所詮人間だ。武器を手にすると、訳も分からず攻撃する。何でカマイタチを使えるようになったのかは不思議だが、…長か、ツバクロに聞いてみよう……。
…今は、取り敢えず……そう、帰って…長に報告しなきゃ……でも……ね…む…い……。

波打ち際の濡れた砂の上に、両手を投げ出して横向きに倒れてしまった妖精がいた。あまり体力のないカワセミが、気を張って頑張りすぎるとこうなる。ペース配分って事が出来ない。
だっていつだって……一杯一杯なんだから……。
だから、ボク……ノスリがいないと……
……

あったかい……。
岸辺で寝ちゃってた筈だ。ノスリが来てくれたのかな……？
だんだん意識が戻って、近くで焚き火が燃えているのが分かった。温かいのは、自分の頭と肩の下にある誰かの体温だという事にも気付いた。ノスリ……？……・・・違う・・

不意に危機感に襲われ、意識が呼び戻された。跳ね起きると、びっくりした表情の女の子の顔が真ん前にあった。
「……！…」
一瞬、沈黙の後、目の前が真っ黒になる。
「急に起き上がるから貧血起こすんです」
また膝に頭を押し付けられた。何が何だか分からない……。
「貴方の馬が、呼びに来てくれたんです」
草の馬が人間に助けを…？　まさか、信じられない。しかし林の奥では、草の馬と女の子の尾花栗毛が、違和感なく並んで休んでいる。
女の子は小さなハンカチ包みを妖精の手に握らせた。
「石…、大事なものですか？　一応、拾っときました」
「そう……すまない…」
何で自分ってこう、半端なんだろう。つくづく情けない…。
「…心配しちゃ、ダメですか？」
「……は？…」
「人間は、貴方を心配しちゃ、ダメですか？　初めて逢った時から心配で心配で…、放っておけなかったけれど、何をすれば貴方の助けになれるのか、分からなくて、すみません」

「……」
「人間ってそんなバカですか?頼りないですか?」
「…今は助けになっています。もう少し…寝かせて下さい」
カワセミは頭を膝に埋めて丸くなった。何だか色々言われるのが面倒くさいのもあったが、基本的に…心地よかった。安心して眠れたのだ。

やや離れた草むら。潜む二つの影。
「すげえ、ずっと膝枕してんぞ!!」
「凄いの?」
「膝枕ってのは愛情のバロメーターだ。頭って重いんだぞ!」
「ふうん…」
蒼の妖精の青年二人がこっそり様子見に訪れた時には、すべてが終わり、湖畔で倒れたカワセミを発見した女の子が、彼を林の中に引きずって行った後だった。
これは…手を出すのは野暮ってもんだ。
「……」
「複雑かい」
「…何が?」
「娘を嫁に出す、親の気分、とか?」

「…はは…。まあ、あいつも、もうちょっと、他の事を気にする余裕が出来りゃいいと思ってた。あいつが大変なのは分かっていたんだが」
「うん…」
「あいつの頭、洗っといてやって良かったな」
「はは…」
＊＊＊
どれ位眠ったろう? 枕が少し揺れて、目を覚ました。女の子が焚き火に薪を投げ入れた所だった。
「すみません、起こしちゃいましたか?」
カワセミはゆるゆる起き上がった。今度は貧血を起こさずに済んだ。女の子から離れて、焚き火の反対側に這って行く。
辺りは霧が覆っているが、ブッポウソウが鳴いている。まだそんなに真夜中じゃない。

「ボク、もう大丈夫…。キミ、家族が心配するんじゃないの?」
「ウチは大丈夫です。私、しょっちゅういなくなるから、家族も慣れっこなの」
「……」
「あ、別に苛められているとかじゃなくて。みんな優しいけれ

ど、本当の血縁じゃないから。」
　女の子は立ち上がって、辺りの落ち枝を集め出した。手慣れた感じだ。
「何だかね、家に居場所がなくて、時々、こういう所で一晩、ボ―…と過ごしていたりするの」
「……」
「ごめんなさい。つまんないですか、こんな話」
「…キミが、話したいんなら、聞いているよ…」

　枝が投入されて、焚き火はパチパチとはぜて大きくなった。
「家族も…何となく分かっているから、何も言わず、好きにさせてくれているの。私が『見えざるモノ』を見て、『聞こえない声』を聞くの」
「…風も使えるのか」
　女の子は申し訳なさ気に頷いた。
「蒼の長様がおっしゃるにはね、私の本当のお父さんも、お母さんも、薄―く蒼の妖精の血が入っているんだって」
「……」
「でもね、人間だから、人間として穏やかな、幸せな人生を送りなさいって」
「…長が正しい…。ボクも、そう思う……」
　女の子は、棒で焚き火を弄くった。オレンジの火の粉が上がり、霧の中に吸い込まれる。

「ね、貴方は天使ですか？」
　いきなりな事を聞かれてカワセミは面食らった。
「ち、違うって！　なんでまた?!」
「いえ、蒼の里には天使さんもいるのかなあ…って」
「…??　ボクはただの蒼の妖精だ。蒼の長の弟子で、あのヒトを手伝って補佐するのが仕事の」
「そう……」
　女の子はちょっとがっかりした感じでまつ毛を伏せ、細い枝で焼けた灰を突いた。
「天使さんじゃなかったんだ…。普通の蒼の妖精さん…。普通の蒼の妖精さんなのに、長様の弟子だったら、あんな危ない目に遭って、命も危険に晒すの？」
　危うげな表情ががオレンジに照らされている。
「さあ？　他の弟子達はどう思っているか分からないけれど、ボクはそれでいいと思っている。命を掛ける事が損だとか、考えた事もない」

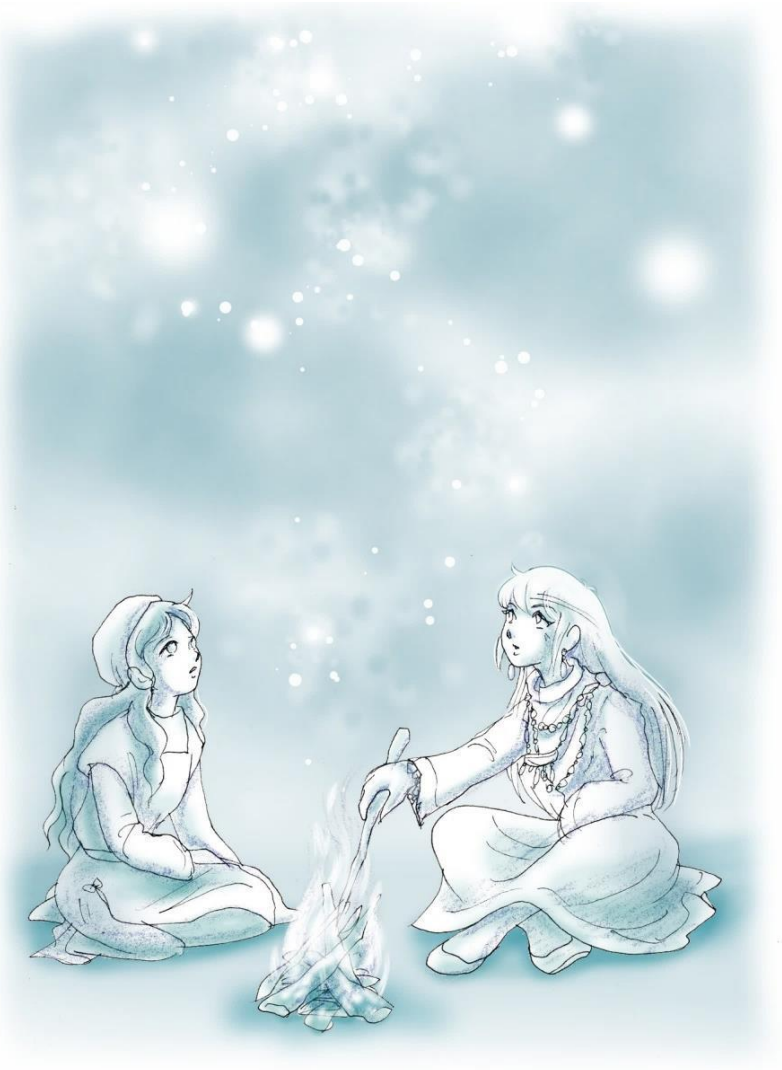
「そう……」
女の子は膝を抱えて、両腕の間に顎を埋める。
「いいなあ…」
「……」

カワセミはマジマジと女の子を見た。火の粉の向こうで夢見るような表情をしている。
「私も、あのヒトの役に立ちたい。助けになりたい。命を掛けたい。なのにあのヒトの為に出来る事は、人間として幸せになる事だけ…なんて…」
カワセミはもう一度女の子を見つめ直した。
自分が長の為に働くのは、長との間にそれなりの積み重ねがあるからだ。この娘は、長とはほんの少ししか会っていないだろうに、何でそこまで想えるんだろう?
「蒼い髪のヒトを見かけても、見えない振りをして、草の馬が飛んでいても、視線をそらして、羊を追うの。でも、本当の私って、どこに在るのかしら…」
「……」
「ごめんなさい。こんな事、言われても、困りますよね。言ってみたかっただけ。初めて言ったわ。もう忘れて。聞き流してくれて有難う…」
女の子は膝を抱えて丸くなった。
「もう寝ます。おやすみなさい……」

カワセミは、焚き火越しに真っ暗な湖を見やった。
「昼間の、大ナマズ…」
「……」
「人間の、湖への畏敬の心が失われた事に対する、怒りと寂しさが募って、魔のモノと化した。でも悪い心は持っていない。導き次第で湖の守り神になる」
「……」
「その仕事は、まだボクじゃ無理だから、蒼の長が来られる」
「……!!」
女の子は、閉じていた目を大きく開いた。
「そう、また、あのヒトを見る事が出来るのね」
「見るだけじゃなくて、言えばいいじゃないか?」
カワセミは女の子を凝視した。
「キミの、そういう気持ち…」
女の子は身を起こして、カワセミを見た。
「言ったって、何も変わらないでしょう? あのヒトを困らせ

るだけ」
「キミの人生の先行きは変わらないかも知れない。でも、本当のキミに近付けるんじゃないか？　キミの心の居場所が定まるんじゃないか？」
「……」
「それに、あのヒトは…、そんな、無茶苦茶は困らない。だけれど、真剣な言葉は真剣に受け取ってくれる…と思う…」
　それからカワセミは、枝を手に取って赤い炭を細かく突いた。火の粉が立ち登り、きれいな渦を巻いて、霧の中を乱反射しながら高く上がって溶けた。女の子も、ちょっとそれに見とれた。
「ボク達妖精から見ると、人間の人生は本当に短い。その短い人生に、何で伝えたい気持ちの一つも伝えないんだ…って思う」
「……」
　見上げる火の粉の中に、消えないでいつまでも漂っている光がある。薄緑に明滅しながら飛ぶ蛍だった。良く見ると、頭上の樹の中に焚き火の灯に惹かれた蛍が散らばっていた。
　チラチラする光の樹を眺めながら、女の子は目をしばたかせた。まばたきする度に睫毛の隙間に雫が溜まって、ひとつこぼれた。
「心配していたヒトに心配されちゃった…。有難う……」
　やっぱり、見間違いじゃなかった。透明な綺麗な羽根のある…天使なんだわ、このヒト…。

　困ってしまった二人組がいた。
　カワセミが目を覚ましたら連れて帰ろうと登場するタイミングを伺っていたが、…とてもじゃないけど、割り込める状況じゃなくなってしまった。
　二人、気配を殺して、焚き火の側の藪を離れた。
「ありゃあ、冷やかしようもないぜ」
「カワセミがあそこまで、『出来る奴』だとは…びっくりだな」
「百点満点で何点だ？　ドンファン」
「…九十六点…」
「何だ、その微妙さ加減？　足りない四点は何だよ？」
「長が、受け流さないで、大真面目に捉えて途方に暮れる可能性を軽視している」
「ああ…。そいつぁ、…困るな……」
「まあ、そうなったら、僕らでフォローしようよ。あのヒトも以外とシャイだからねぇ」



遠くの焚き火のシルエットを見ると、片方は寝入り、片方は焚き火をつつきながら起きている。慣れない焚き火番を朝までやるつもりだろう。

「あいつ…、気持ち気持ちって、自分の気持ちは？」

ノスリが吐き出すように呟いた。

「……」

ツバクロも、暗闇の中に染み入るような、心許ない火を見つめる。

「ねえ、僕達、ここに来なかった。何も見てない、聞いてない」

「…ああ、…そうだな…」

＊＊＊

朝早く、フラフラのカワセミが蒼の里に降り立つ。

馬繋ぎ場には二人の仲間がいて、支えられながら、長に任務の報告をした……

……所までは記憶にある…。

目が覚めると、自分のパオの天井があった。額に乗せられた手拭いがカピカピだ。

枕元には様々な薬草や薬湯が並んでいる。目も鼻も口もカラカラ。手足も自分のじゃないみたいに力が入らない。

入り口が開いて、オタネ婆さんが入って来て、何かガミガミ言って、額の手拭いを変えて、凄く苦ーいのを飲まされた。

……次に気が付くと、二人の仲間がいた。

「よっ、眠り姫のお目覚めだぞ」

「大丈夫？　まず、水分とって」

「……いま……いつ？　ボク、どれ位寝ていたの？」

二人にあれこれ世話されながら、カワセミは目をキョロキョロさせた。

「一週間と半日。熱が下がんなくてね。これ、繋いでおいたよ」

ツバクロは石の首飾りをカワセミに渡した。石が包まれていたハンカチについては言及しない。

「悪かったな。俺がやっぱりフォローに行ってやれば良かったな」

「……」

カワセミは寝返りをうって、うつ伏せになった。

「カワセミ…」

「ボクって…ダメだ…。どうして、こんなすぐ、イカれちゃうんだろ…。キミ達に負担かけて、ちっとも長の役に立てない」

二人は困った顔を見合わせた。ままある事なのだが、今回は二重のダメージを喰らっている分、傷が深い。

「キミが湖から帰ったその日、長は大ナマズの所へ話しに行ったよ」
　カワセミは転がってこちらを向いた。
「一人で？」
「うん」
「…で？」
「ああ、うん、何回か通うみたいだよ」
「えっ？」
「ナマズに会いに、だよ」
「……」
　二人とも、あの少女がどうしたのか知らない。帰って来た長は、いつもと変わりなかったのだ。
　何とも言えなくなってしまった所へ、ドカドカとオタネ婆さんが入って来た。
「小僧、起きたか。まったく、働いている時とぶっ倒れている時が半々じゃないか。いつになったら、長様の片腕までに成長してくれるんじゃい」
　婆さんが歯に絹着せぬのは毎度の事で、いつものカワセミならノラクラと受け流すのだが、今回は塩を刷り込まれる傷口が深過ぎた。
「そう…ボク…永遠に…長の役に立てないんだ……」
　ああっ…このモードに入っちまうと、厄介なのにいぃぃ～～と恨みがましい目で見る二人を尻目に、婆さんはツカツカと部屋を横切り、丸まっている小僧ッ子の右手首をワシっと掴んだ。
「アダダダダ――！」
　無理もない、挫いた怪我が癒えていないのに。
「それだけ元気があれば行けるな。長様がお呼びじゃ」
　婆さんは下げてきた壷から膏薬を取り出し、手首にベッタリと塗って、目にも止まらぬ早業でテーピングしてくれた。痛みが嘘みたいに治まった。
「…それ、寝てる間にやっといてくれりゃよかったのに」
「目が覚めて、いつの間にか治っていましたじゃ、有り難みがなかろう！」
「ババァ！」
「ほれ、長様の御前に、そんな格好で行く気かい！　とっとと着替えんかい」
　婆さんは構わず、カワセミの寝巻きを引っぺがし始めた。
「分かった、自分でやるから、やーめーて――！」

ノスリとツバクロは呆然と眺めていたが、やがて笑いが込み上げてきた。オタネ婆さんは、身寄りのないこの子が、可愛くて可愛くて、しょうがないんだ。

ノスリもツバクロも血縁は多いが、カワセミは早くに両親を亡くして、心にかけてくれる親族もいない。そうして見ると、カワセミにとって長が絶対者なのも、何となく解る…。

すったもんだの末、身支度を整える頃には、カワセミもしゃんと立って、表情もはっきりした。もっともオタネ婆さんも、正確に回復する頃を読み切っていたんだろう。

「早よう行かんかい！」

蹴飛ばすようにカワセミを追い出してから、婆さんは残った二人に向き直った。

「……？」

「お主ら…！　あの子がどうしようもなく身体が弱いのは知っておろうが！」

「は、はい…」

「弱いのに、分不相応に頑張り過ぎて、しょっちゅうオーバーヒートするのも知っておろう！」

「…はい…」

「じゃったら、しゃんとフォローせんか！　あの子を殺す気かあぁ〜〜〜!!」

要らん説教を喰らう羽目になってしまった。

「どうぞ、入って下さい」

いつもは長に逢えるのは、嬉しくてワクワクするのに、今はちょっと怖い…。

御簾を開けると、いつもと変わらぬ長がいた。

「身体の方はどうですか？　不調なら、まだいいんですよ？」

「はい、もう大丈夫です。オタネお婆さんのお陰です。心配かけて、すみません」

「そうですか…。今回の湖の件、ご苦労でした。主殿が予想外に喧嘩っ早くて、貴方に負担をかけてしまいました。良く治めましたね、さすがは貴方です」

カワセミは口をキュッと結んで下を向いた。こういう瞬間に、何時如何なる時もこのヒトの為に全力を尽くそう…と、決意新たに出来るのだ。

「件（くだん）の主殿ですが、何度か説法を授け、水神となって貰う事になりました。その役目、貴方にお願いします」

「え…？　ええっ?!」
「大自然の繋がりを説く基本の説法です。貴方ならもう出来ます。第一、先方が貴方を気に入っているんです」
「は…ぁ…」
「今日が新月だからお願いします。後、忘れずに毎回新月の時、通って下さいね」
「は…、はい」
カワセミには、遥か彼方の事と思えた仕事だ。その他の心配事なんて吹っ飛んでしまった。
長は他に何も言わなかった。カワセミも当然聞かない。
多分あの女の子は思いの丈を伝え、長はきちんと受け止めてあげたのだろう。長にしたら、沢山の出来事の内の一つだ。女の子はそれで自分に自信を持って、人間の人生を生きて行ければいいんじゃないか…と、思う。

カワセミは夜空に馬を走らせた。
新月なので真っ暗だが、星が地上に映っている所が湖だ。
「……?」
湖畔に小さな灯りが見える。
「まさか、あの女の子、また家出して来ているのか?」
そうだったら、可哀想だけれど、ちょっと遠慮して貰わなきゃ…。

しかし、馬を降下させるにつれ、それが焚き火ではなく、二つの火が地上より高い所で燃えているのが分かった。
「篝火(かがりび)…」
湖畔は以前と雰囲気が違った。
篝火はあの寂れたお堂の前で焚かれていたが、お堂には新しい板が張られ、小奇麗(こぎれい)に改装されていた。
灯りの間に立つヒトがいる。
「…キミ…」
あの女の子?
神木の枝を両手で持ち、あの絹のズボンを履いているが、今日は、上も同じ色の絹で、カタカゴの花の刺繍の入った長衣をまとっている。カワセミを見ると、神木を掲げて一礼する。

「どういう……コト…?」
カワセミは馬から降りて、よろめいた。また熱が出そうだ。
女の子はカワセミの前に進み出て、もう一度形式通りの礼をした。

「この湖の主様の、巫女を務めさせて頂く事になりました。イルアルティと申します」
「……」
「蒼の長様に任命頂き、主様にお許し頂きました」
「…長が……」
…聞いてないよ……。

長が大ナマズと話をしに来た時、女の子は確かに湖を訪れた。
しかし、自分のカマイタチが付けたナマズのあばたを見た彼女は、長に話しかけるより先に、思わずナマズの前に進み出て、正直に謝ったのだ。
ナマズは己の言葉を人間に伝える架け橋が欲しい、女の子は自分の在るべき場所が欲しい。長がポンと手を叩いて、こういう結果になったのだ。
「安易な…」
でも…あのヒトならではの、粋な采配だ。
「家族にそう言ったら、お父さんとお兄ちゃん達がお堂をキレイにしてくれたの。お父さん…、私にどうしたらいいのか良く解らなかったけれど、ようやくお前の為に何か出来たよって喜んでくれた。暫くは、羊番もやりながらの通いの巫女だけれど、これから主様と共にしっかり勉強して行きます」
イルアルティはそう言って微笑み、湖に神木を掲げて一礼した。水面が盛り上がり、静かに大ナマズが現れる。
カワセミは背筋を伸ばして、息を吸った。自分のやるべき一番の仕事を、長はお膳立てしてくれた。精一杯努めるだけだ。
大地と風と湖の精気を集めて、その手が静かに光り、主と巫女に、大自然の理を説く。
林の奥から篝火を慕って蛍が漂い出る。薄緑の明滅の中、静かに時が流れる。

主サマも水底へ戻り、帰りがけ、形式的に見送る女の子に、カワセミは今一度振り向いた。
「長には、気持ち、伝えられたの?」
「いいえ…。でも、いいんです。伝えなくとも分かってくれていたから」
「…そう?」
「人間の身にして、こうして、あのヒトの役に立てている。これ以上は望みようもありません」
「うん…そうか…」

「貴方に心から感謝します」
「…うん……」
不意に、離れた藪でバサバサと音がした。あまりに焦れた二人組が、つんのめった音だ。
「ノスリ、ツバクロ！」
二人は目を丸くするカワセミに悪びれもなく近寄った。
「遅かったからさ、またオタネ婆さんに説教食らいたくないし。具合、どうだ？」
「…うん、平気…」
「じゃあ、この巫女ちゃんに、僕ら、紹介してくれる？」
ツバクロが、里の女の子百発百中の流し目を発動する。カワセミは慌ててその前に立ち塞がった。
イルアルティは目を丸くしながらも笑顔だ。ようやく自分の在るべき場所に行き着いたようだ。

ヒトの縁(えにし)は不思議な物。
このイルアルティの母親がいてこそ、この三人の弟子は在る。それを四人が知るのは、まだ当分先の事。
中天の天の川は丁度湖の真上に在り、新月の漆黒の中、天と地に二本の星の河を描いていた。

その二本は遠くの地平で交わる。

～おしまい～

二〇〇九・八・某